

# つむぐニューズレター

新潟いのちの物語をつむぐ会

事務局：〒940-0075 長岡市渡里町1-2 長永寺（木曾 隆）

電話：0258-33-0804/Mail：[info@tyouei-ji.com](mailto:info@tyouei-ji.com)

<https://www.inochinomonogatari.com>



## 第11回新潟例会特集



### テーマ「若者の生きるを考える」

2023年12月9日（土）の午後、新潟市中央区西堀通5番町、かつて三越デパートがあった建物の隣にある光林寺にて、第11回例会が開催されました。光林寺のご住職様には、新型コロナウイルスの大流行が始まる以前に、例会の会場としてご協力頂ける約束をして頂いていましたが、コロナ禍の中で延期につぐ延期となり、ようやく開催がかないました。



長い間お待ち頂いた伊波ご住職様、本当に有難うございました。基調講演では、身寄りなし問題研究会代表の須貝秀昭さんをお招きし、「若者の生きる」に焦点を絞り、学び、語り合う一日となりました。朗読やアート展示も行われ、知的刺激に溢れた一日となりました。

## ◆基調講演「身寄りなし問題と若者支援」



## NPO法人身寄りなし問題研究会

代表 須貝 秀昭さん

昨年まで私は高齢者の相談窓口で仕事をしていました。そこでは様々な相談を受けます。最近多いのが「身寄り」問題です。身寄りがいないのでアパート契約できない、就職できない、施設入所できない、手術のときに立会を求められた、孤独死が怖い…。

我が国は現在でも家族がいるのを前提としている。赤ちゃんのとき、けがをしたとき、病気になったとき、障害を負った、介護が必要となった、そして死んだとき…まさに生老病死すべての場面において家族による支援が当然とされている。まさに制度のはざまにあるのが「身寄り問題」であろう。そんな現状を危惧し自ら発起人となり専門職（ケアマネジャーや医療相談員、弁護士等）の有志に声をかけて2017年6月に任意団体「身寄りなし問題研究会」が発足しました（2023年にNPO法人化）。

『身寄り』問題は、排除の問題であり、権利擁護の課題です。まず、『身寄り』がなくても居住・医療・介護・就労等から排除されないような支援や仕組みが必要とされます。『身寄り』がないことはもはや「例外」ではなく、「第2のスタンダード」であると言ってもいいでしょう。

「人が自分のことを自分でできないとき誰がそれを支えるのか。「地域で」「みんなで」と答えたい。そして身寄りなし問題研究会のスローガンを紹介します「大丈夫、なんとかなる」です。

新潟いのちの物語をつむぐ会の成り立ちは、築地本願寺での医療者と宗教者が語る会が発端だと聞いています。お寺で医療者と宗教者が命の話をする場所。以前より非常に興味があって、まさか身寄りなし問題研究会が第11回の例会にお声がかかるとは思っていませんでした。そもそもお寺は人々が日常的に集まるコミュニティとして機能していたはず。それが現代ではお寺さんはなにか特別な場所となってしまった。つむぐ会の活動こそ、この原点であると考えます。身寄りなし問題研究会もその原点を取り戻すべく、角田山妙光寺と組んで日常的に困りごとの相談ができる仕組みを仕掛け中です。檀徒さんが困ったらお寺に相談する。医療や介護、福祉のことは研究会が相談にのり、心の不安や死後のことはお寺さんに聞く。お寺+福祉団体法人という新しい支援の形です。一般社団法人生支縁（いきしえん）という名前です。これがロールモデルとなって至る所でお寺さんが身近になればいいなと思っています。

## ◆ 「生きる」を考える朗読の時間



株式会社JOV代表取締役

ナレーター、MC、

アートディレクター

谷藤 幹枝さん



ふさわしい本など思いつかん！

と思っていたら、例会長から「これを！」と、続々本の紹介が。読んでも「？」だ。著者達に「命をつむぐ」目的はおそらく無く、読み手が「そう感じればいい」のだと合点。読んだのは水谷もりひと氏の「あなたに贈る21の言葉」の前書きとエッセイを2編。

=人生が旅なら、楽しい相手と一緒に旅をしたい。だったら旅の供である「自分」をもっと好きになって楽しい旅にしよう=

私は乳がんになり左乳房が無い。子宮と卵巣も摘出し開腹の痕が残る。希少がんGISTを切除し人工肛門を造った。醜い身体だけど嫌いじゃない。愛おしいくらいだ。「自分が好き」では無いけれど、それでもなんか面白い人生。今回一緒に自身をモデルにした乳房摘出後のアート作品と、子宮卵巣摘出後のアート作品も展示した。人工肛門アートはハードル高いけど、ガッツある写真家さんは名乗り出て欲しい(笑)。やっぱり楽しい人生だ。

## ◆参加者によるいのちの物語をつむぐタイム



・愛の問題である。一人になることへの恐怖が怒りに転化され、事件が起こる。物事を、二人を基本にして考えるべきだ。

・中学校くらいから、社会的な問題が噴出する。沢山の問題を抱えた生徒が養護室に集まる。

・一人一人がもつ良いところを伸ばす教育ではなく、均一のことができることが良いこととされる教育になじめない子たち。貧困のなかで自分の夢をかなえるこ

とさえ金銭的な問題で難しい子供たち。今の世の中は、本当に困っている子供たちを手助けするしくみが欠けていることを日々感じている。

・生活するために働いてきたが、定年退職したあとのセカンドライフを考えて、ボランティアを始めた。

・この会は、とても重要だ、今度はこの会を宣伝するために北海道から沖縄まで歩いてよい！

・男性は退職後に社会とのつながりが無くなり、孤立することが多い。この原因として、職場での仕事を通じた地位や収入などを基本とした関係以外の人間関係を築いてこなかったことが関係しているのではないか。こうした中で、中・高齢男性の社会的孤立の問題などは、社会全体の問題として対処すべきであるとの風潮がある。しかし、当事者である男性自身が自分の問題として捉え、考える必要あるのではないか。周囲の人々

(主に女性)が面倒をみる仕組みを整える議論ばかりではなく、中・高齢者男性がもっと人とのつながりの大切さを自覚し、自立して行動する必要があるのではないか。

・若者についての意見交換では、家出、ト一横での路上生活、優しい声をかけ近づいてくる悪い大人の餌食(ホストにみつぎ、多額の借金を背負わされ、風俗で働かされる)になっている現状につ

いて話し合われた。餌食にされる路上生活の若者は、「お前は悪くない」と一瞬ではあるが自分の存在を認めてくれる人に癒され、深みにハマってしまう悪循環の状況に対して、「温かい本当のつながり」によって救うことはできないのだろうか。少年鑑別所で長年支援を実践している僧侶からは、人としての関り、つながりが更生へ大きな力になることが紹介された。

2つのテーマに共通していることとして、困ったときに「助けて」と言える個人、それを受け入れる社会の大切さについて考える機会となった。





・身寄りナシ問題について各々の本音を気兼ねなく話せる場となりました。

・正直、あまり考えたことがなかった

という感想がありながらも、

メンバーの真の思いは

「社会がもっと寛容になって身寄りがなくても安心して生きていける世の中になってほしい」

という希望・願いであることが確認できました。



また、血縁以外のファミリーを持つことが今後更に重要になっていくだろうと思われるが、その縁繋ぎを担うのはお寺なのではないか…という意見もでました。

◆悪性リンパ腫のご主人と「思い出作りをしたい」と、イタリアに旅行に行ったり、弘前の桜を見に行ったりしたことを語られた女性は、「病気だからこそ勇気をもっていろんなことができた」と、話されていました。

◆会場には、上越市でがん患者会を主催されている「RENの会」の方も参加されており、ピア（仲間）・サポートの活動をしていることが紹介されました。RENの会では、がん患者さんが1人で悩まずに、安心して悩みやさまざまなお話を語り合える場所をつくることを大切に活動されています。若者の身寄り無し問題を含め、まずは、知ること、周りに頼ることを知って欲しいとグループ全員が感じました。この分かち合いグループでは、ヤングケアラーについての話題に焦点を当てました。ヤングケアラーは、自分自身がヤングケアラーとっていない場合が多い。何故かという、学校教育で教えられていないのが現状だからです。今の現状を“当たり前”と感じている子が多いそうです。そのあたりの感覚によって、いつの間にか、人生で大事な10代、20代、いわゆる若者の青春を奪われてしまう。当たり前と思っているから、学校の先生に相談しないし、周りの大人も気づかない。そういった授業を学校で取り入れ、知ること、周りに頼ることを教わることで、若者の人生、大



切な時間、即ち“いのち”を守ることに繋がり、その人らしい人生を謳歌できるのではないだろうか。時間いっぱいまで熱のこもった意見交換が続き素晴らしい時間になりました。

ファシリテーターの長谷川も、22歳の時、ヤングケアラーの経験があり、当時のケアマネジャーや介護スタッフに人生を助けられたと言っても過言ではない経験があります。“知る”と“頼る”ということは『いのち』を守ると言うことなのだと感じます。必要な方に必要な情報が届く環境が必要です。学校教育に、この身近な社会問題を取り入れてもらえることを切に願います。

## ◆若者代表 アウトサイダーアーティストによる展示

### アウトサイダーアーティスト 木村 真さん



## ◆「伴走できることの尊さ」 長岡西病院ビハラー病棟 医師 今井洋介（医療者代表）

第11回例会を仕切った長谷川拓さんは36歳。これまでの例会長の中で断トツに若い。16年前彼自身がヤングケアラーで、出口の見えない日々を送っていた。その時は感謝の気持ちは持てなかったけれど、複数の大人の手を借りて、今がある。そして、いつでも若者に手を貸してあげることのできる、そんな大人を目指している。

素敵なお作品を展示してくれた木村真くんは、本例会では会計を担当した永野慎太郎さんに、描くことに秀でていることを発見された。

同じ視点に降りていくことができる。そして「ともに」歩むことができる。

そんな大人たちによってつくられた、とても希少な美しい会となりました。

黄昏時に谷藤幹枝さんの朗読をもってくるセンスも見事でした。

## 第12回新潟いのちの物語をつむぐ会長岡新潟例会今井洋介実行委員長からメッセージ

◇人が人生の最期を迎える場所の一つであるビハーラ病棟。

そこでは、最期のときを生ききる人々がいる。

ターミナルケアの現場を切望しながら、自らががんを発症したためにタイミングを逃し、

数々の要職を経て、ようやくビハーラ病棟の師長に着任した

佐々木美奈子氏を講師に迎え、その生きざまを聴く。

◇昏睡状態の方と意思疎通を図り、覚醒への道をさぐる Coma therapy(コーマセラピー)

の実際を臨床心理士であり、CWJ コーマワーカーでもある三浦かおり氏よりご指導頂く。

◇会の締めくくりは、雲林重正さん、中村賢識さん、井上陽雄さん、三人の僧侶による雅楽演奏である。幽玄の音楽に抱かれつつ、各自一日のことを思い返し、整理して頂きたい。

# 第12回例会 in 長岡 6月8日(土) 14.00(受付 13.30~)

会場 **徳聖寺** ●長岡市上田町 2-25

懇親・交流会★17時30分~ **徳聖寺 庫裏** ●同上 ☎0258-33-1586

## ●テーマ「いのちの明滅する場所で ~ターミナルケアの現場」

●ご挨拶 中村賢識さん 徳聖寺住職

●話題提供「人生の曲がり角 一看護師として」

佐々木美奈子さん 崇徳会 加茂病院看護部長 前長岡西病院 ビハーラ病棟師長

●分かち合い

●「コーマワーク ~昏睡のいのちとつながる~ ミニ・ワークショップ」

三浦かおりさん 公認心理士 臨床心理士 CWJ コーマワーカー

コーマワークとは: 昏睡や認知症など、日常と異なる意識状態の方と言葉を超えてつながるワークをご紹介します。

**申込 新潟いのちの物語をつむぐ会事務局**

長岡市渡里町 1-2 長永寺内/電話 0258-33-0804

mail [info@tyoueiji.com](mailto:info@tyoueiji.com) https

//www.inochinomonogatari.com

参加費 一般 1000 円 会員 500 円 学生無料

懇親・交流会 3000円、学生1500円、高校生以下無料



編集後記

●日本縦断を終えられたばかりの須貝さんと、谷藤さん、木村さんの個性がぶつかり合い、輝いていました！

(今井)

■新潟いのちの物語をつむぐ会は、本来、例会と例会終了後の懇親会はワンセットの考え方で開催しています。

ところが新型コロナウイルス感染が始まって以来、懇親交流会を開催できずにいました。久しぶりに大いに盛り上がりました。

■第11回例会実行委員(敬称略)

実行委員長 長谷川 拓

実行委員 井上真由美 今井洋介 大谷美穂 高野和己 中塚英樹  
永野慎太郎 西川薫

